

人類は退歩しているのか？

メソポタミアの遺跡を「イスラム国」のテロリストが次々破壊——と聞いて、教科書を引っ張り出した人も多いだろう。私たちは中学生のころ世界には4つの古代文明があった、と習った。エジプト、メソポタミア、インダス、黄河の4つだ。

そのひとつ、メソポタミア古代文明の石造人物像、彫刻などの歴史的遺産をハンマーでたたき壊す映像をしつこく流している。過激派たちは「イスラム教は偶像崇拜を禁止している」と言うが、歴史を習っていないのだろう。イスラムが現れるはるか前にこの文明は生まれていたのだ。彼らに勝手にやられてはたまらない。

アラブの地の先住者は高度の文明を創りあげ、多くの遺産を残した。「楔形文字」をはじめ、暦法、数学の発想法などが優れていたといわれる。

現在のイラク領内のチグリス、ユーフラテス流域に発生した文明がメソポタミアだ。シュメール民族が紀元前3000年ごろ都市国家を創った。前2000年ごろバビロニア帝国が誕生し、前1700年ごろハンムラビ王がメソポタミアを統一、中央集権化を図る目的で有名な「ハンムラビ法典」を編纂した。「目には目を」の復讐の教えはここから来ているらしい。

残念ながら「イスラム国」の“ならず者集団”は紀元前の古代人より後れてしまったようだ。「人類は退歩している」という俗説を思い浮かべてしまう。

現代はカー、クーラー、カラーテレビの3C時代はすでに終わり、核兵器のような武器も発明され、スマートフォンのようなハイテク

商品も次々できている。宇宙開発も「月から火星へ」と進み、今では人の細胞の再生まで可能になった。それでも人類として、「進化した」といえるのかどうか。イスラム国のやり口をみていると、ひょっとして「退歩の過程」にあるのではないかと思ったりする。

示唆的な話がある。アマゾンのジャングル地帯に現代文明から隔離された先住民がいる。その人たちは「先進民族のなれの果て」という異説を流した人がある。かつては高度の文明を築きあげ、繁栄を謳歌したが、何らかの理由で衰退の道をたどり、今「未開の先住民」と呼ばれるようになった。そんな説を聞くと先住民に対する見方もおのずと変わってくる。

先住民の姿が高度化した文明の終着点だとすれば、興味深い話だし、映画かアニメで表現しようとする人が出てきておかしくない。

『神々の指紋』というSF風小説がある。米ジャーナリスト、グラハム・ハンコックの著書で、邦訳もされている。オカルト小説という悪評もあり、非現実的な内容も多いが90年代後半にはベストセラーにもなった。

賛否両論を承知のうえで、「信じてみるとおもしろい話」の代表格として登場してもらおう。ハンコックは現存する地球のはるか前に高度文明が支配する地球があったとする。大陸の大きさ、位置も現在と異なり、今の考古学や文化人類学では手に負えない世界があった。

ひとつの例が次のようなものだ。現在では別の大陸にあるエジプトとメキシコとペルーのピラミッドの格好が同じなものもそうだが、ピ

ラミッドの下辺の長さ（合計）が3.14のn倍になっているのが「神の仕業」としか考えられないという。

現代の常識では、太古の時代、海洋を越えて相互に連絡などできないから、誰かが教えたに違いない。あるいは想定外の連絡手段があったかもしれない。そうして同じようなレベルの先進知識が地球上に広がった可能性があるというのだ。

大西洋のアトランティス大陸、太平洋のムー大陸など「神話」に似た奇談は欧米ではかなり流布されている。いずれも高度文明の国家がそこにあったという点で共通している。それを「奇想天外」と排除せずに考えると、さまざまな発想が出てくる。

ドイツ人の考古学者ハインリッヒ・シュリーマンは19世紀後半にギリシャ神話（ホメロスの叙事詩）に出てくるトロイアが実在すると信じて、今のトルコで発掘に没頭、「トロイアの黄金」を発見した。「バカじゃないの？」とみんなに軽蔑されながら、執念深く神話の正しさを証明した。

さて4大古代文明に戻るが、「アンデス文明」もバカにできない。メソポタミアやエジプトと同じ紀元前に南米大陸に広がったアンデス文明は高度先進という点では4大文明に匹敵する。これを入れれば「5大」古代文明となる。

1万2000年以上前にユーラシアからアジア人が北・南米に渡り、インカ帝国をはじめとする文化圏を築いた。でもイスラムと違って、「俺たちの教義に合わない」という理由で、世界遺産のマチュピチュ遺跡をぶっ壊すインディオはいない。

「ギリシャ問題」はなぜこじれるのか

「没落貴族」という言葉がある。相続した過去の遺産をもちながら、商才はなく、細々と持ち物を切り売りし、プライドだけで生きている哀れな存在。今の欧州、とりわけ王制が残る英国にはこういう元貴族が多く、ロンドン中心部の紳士クラブなどに入り浸っている。

それでも英国が持ちこたえているのは「改革、開放、国際化」の「3K」を軸に、他国のパワーをロンドンの金融センター「シティ」に取り込み、発展に勢いをつけたからだ。

ギリシャの金融危機をみていて、国全体が「没落貴族」に似ていると思った。ギリシャは紀元前に世界最先端の文化を創り出した国だ。ご存じ、オリンピックの発祥地である。神話や哲学の原点でもあり、ミロのビーナスのような芸術も生み出した。大昔は断トツの文明国だった。しかし英国と違って、凋落ちようらくの後、一向に反省の気配がないし、「シティ」も存在しない。

ギリシャは21世紀になって金融支援をEU（欧州連合）やIMF（国際通貨基金）に要請している。EUはギリシャに対して2015年2月末の債務支払い期限を4カ月間延長することを了承した。しかし、問題点を完全にクリアしたわけではなく、すぐに6月の期限がやってくる。そう簡単に解決できる話ではない。

誰もが心配しているのは急進左派のチプラス政権の誕生で力を得た国民の動きだろう。とりあえずの猶予をもらったとはいえ、ギリシャはEUに対して今後「財政改革案」を提示する必要があり、その内容次第では、極左勢力ごくさの抗議

行動が再燃する可能性もある。「反緊縮策」と「反構造改革」を公約に掲げて首相に就任したチプラス氏はかわいそうに板挟みだ。

でも、ちょっと待ってほしい。EUや国際金融界が求める緊縮政策を守らず、やり過ぎそうというのは虫がよすぎないか。2001年、ユーロ圏の第2陣のメンバーになってから、浮かれてしまったのだろうか。

ドラクマという弱小通貨をもっていたギリシャはユーロ通貨に加盟すれば国の信用が高まり外国からお金が借りやすくなると考えた。実際、ECB（欧州中央銀行）や外国金融機関はギリシャの国債を大量に引き受け、民間の借入も増えた。ところが2008年のリーマンショックで経済は暗転、巨額の債務が返せなくなった。

EUとIMFはギリシャの債務不履行を回避するため、2010年以降金融支援をしているが同国の資金繰りは好転せず、ギリシャとしては国民に厳しい緊縮政策を要求せざるを得なくなった。それに反発した国民は急進左派政権を選んだ。

——というのがギリシャ転落の簡単な経緯だ。欧州はやっかいなお荷物を抱え込んだ感がある。

国際社会は「先進国の債務危機」という全く新しい課題を突き付けられている。実は世界レベルでは債務危機を何度も経験している。最悪だったのが「中南米の債務危機」だ。筆者は1980年代、中南米全域に広がった債務危機を現地で目撃した。カネを貸した側の先進国が震え上がる「不払い同盟」が結成されそうになった。メキシコ、ブラジル、アルゼンチンなどが軒並み債務返済不能になっ

た。国際金融界は「国を救済する方法」がわからず立ち尽くした。

IMFや民間銀行団による救済案「ブレイディ・プラン」が約10年後にまとまり、危機は遠のいた。だが、途上国側は厳しい緊縮策と改革案を受け入れ、同時に日米など先進国の金融機関も大きな損失をこうむった。いわば“痛み分け”だった。

さて、今のギリシャはどうか。何年も経済危機から脱出できないのに国民がプライドとわがままをむき出しにしている。

「先進国の債務危機」が解決困難な理由は「我慢」「苦勞」「節約」を嫌って、今の生活レベルを守ろうとする国民が多いことだ。ギリシャの公務員は労働者の3割もいて、給与水準も比較的高い。58歳から支給される豊かな年金保障もあり、恵まれた国のようにみえる。

途上国からみれば笑止千万だろう。最近では国際的に格差拡大がクローズアップされている。欧州のような「富める人々」が緊縮・改革に反対していることに対し、冷たい視線が途上国の側にあることを忘れてはならない。ギリシャの失態で単一通貨ユーロが危機に瀕していると言う人もいるが、そんな心配をする前にギリシャが身ぎれいにすべきだろう。

今回は南欧にあるラテン系の国々からもギリシャ批判が出ている。イタリア、スペインなどは「ギリシャと同類」と思われているが、彼らも今度ばかりはギリシャの対応にあきれているという。

（日本ブラジル中央協会
常務理事 和田 昌親）

